

成長を続ける六甲山麓と砂防(さぼう)事業

神戸市、西宮市、芦屋市、宝塚市
兵庫県、国土交通省六甲砂防事務所

明治

昭和13年災害

昭和42年災害

阪神淡路大震災

現在

未来



明治期の六甲山



昭和13(1938)年7月 阪神大水害(元町6丁目付近:神戸市)



昭和42(1967)年7月 宇治川の氾濫

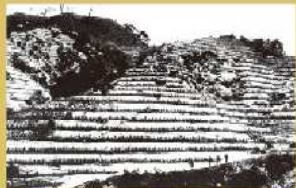


平成7(1995)年 阪神・淡路大震災に伴って発生した地すべり(西宮市 七川百合野地区)



現在の六甲地区

砂防事業



明治期の山腰工(再度山:神戸市)



明治28年 逆瀬川における砂防工事(宝塚市)



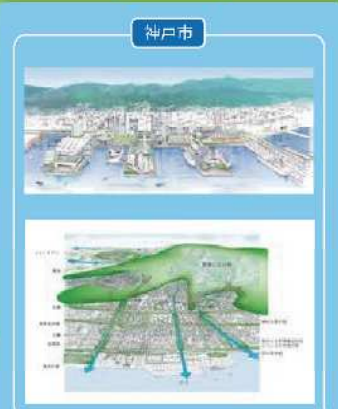
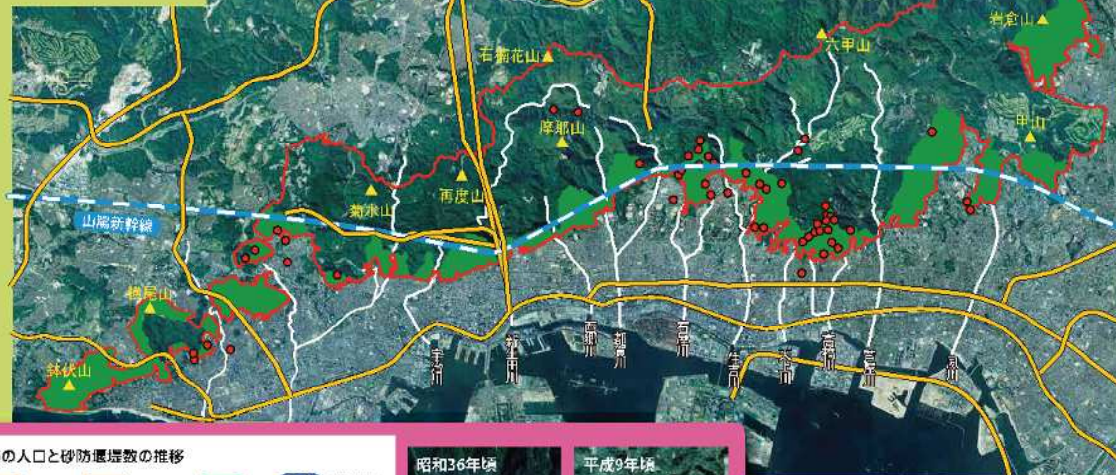
昭和32(1957)年に完成した五助砂防えん堤(住吉川:神戸市)



杉谷山腰工(阪神淡路大震災・災害関連緊急砂防事業)



六甲山系グリーンベルト整備事業



西宮市



芦屋市



宝塚市



江戸時代、燃料として大量の樹木が伐採され、日本の里山の多くが「はげ山」と化しました。

なかでも六甲山は、明治14(1881)年に訪れた博物学者 牧野富太郎が「私は、瀬戸内海の海上から六甲山系のはげ山を見てびっくりした。はじめは雪が積もっているのかと思った」と表現するほど、荒廃していました。

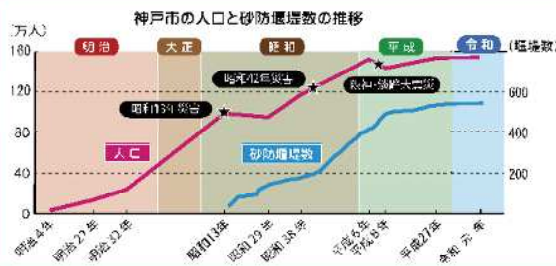
明治初期には、むき出しの山肌と花崗岩の地質が相まって、降雨のたびにいたるところで土石流や洪水が発生。明治26(1893)年に発生した武庫川の大水害を契機に、逆瀬川、太多田川で兵庫県による砂防事業が始まり、明治30(1897)年からは、国による本格的な砂防事業が始まりました。

以来、100余年、阪神大水害、昭和42年災害、阪神・淡路大震災などで、六甲山麓地域はその都度被害を受けながらも、たゆみなく続けられてきた砂防事業によって、徐々に被害は減少、国都府市 神戸市をはじめとする山麓各市の個性豊かな暮らし、まちづくりを支えています。

自然災害からのレジリエンス(復興力)を示す六甲山麓のまち

砂防事業の始まった明治期以降の神戸市の人口の変遷をみると、近年こそ、高齢化の影響で増加率が鈍化しているものの、度重なる自然災害からその都度、速やかに復興を遂げていることが分かります。

一方で、人口が集中することによって山麓部分への住宅地のひらがり(スローライフ)も顕著です。



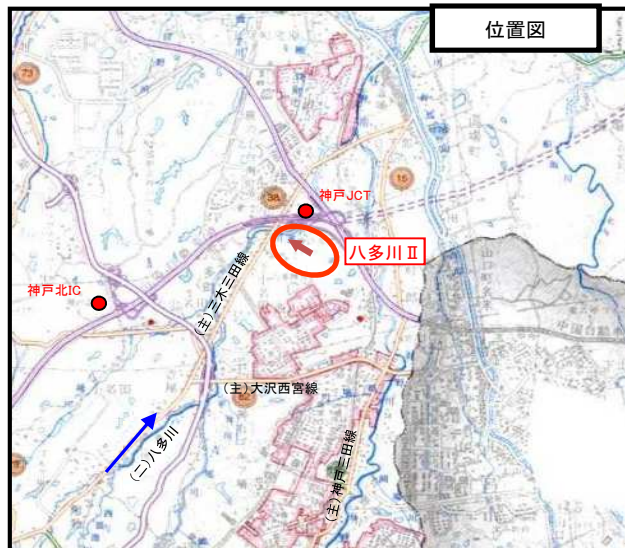
神戸市東灘区住吉地区の住宅地の広がり



- グリーンベルト構想区域
- 市街地に面する斜面
- 森づくり位置
- 主要高速道路

令和4年3月 北区八多川 通常砂防事業が完成

住宅および要配慮者利用施設があり、土石流の発生を防止する為、兵庫県が砂防堰堤を整備しました。

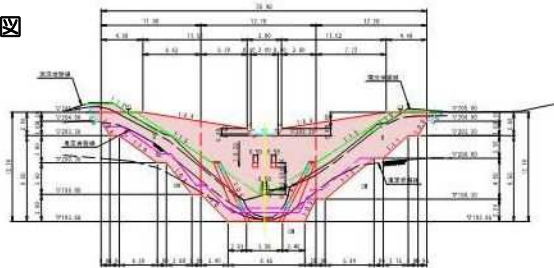


位置図

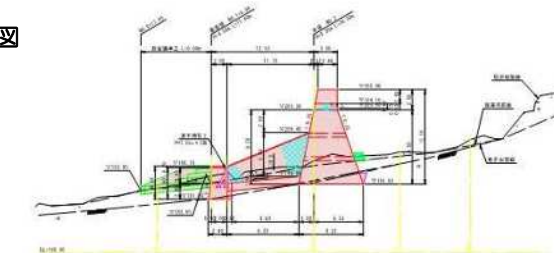
平面図



堰堤正面図



堰堤側面図



全景 (整備前)



工事中 (掘削完了)



完成



【八多川】 (神戸市北区八多町中)

■土石流

保全対象：人家5戸、店舗2軒、
グループホームさくらの家
(主)三木三田線

■砂防堰堤工事

堰堤規模：堤高 9.5m, 堤頂長 35.9m
工期：令和2年1月18日～令和4年3月25日

日本有数の 大都市を守る砂防事業

六甲山

六甲砂防事務所・兵庫県・神戸市



JR三ノ宮周辺の被災状況
(昭和13年阪神大水害)



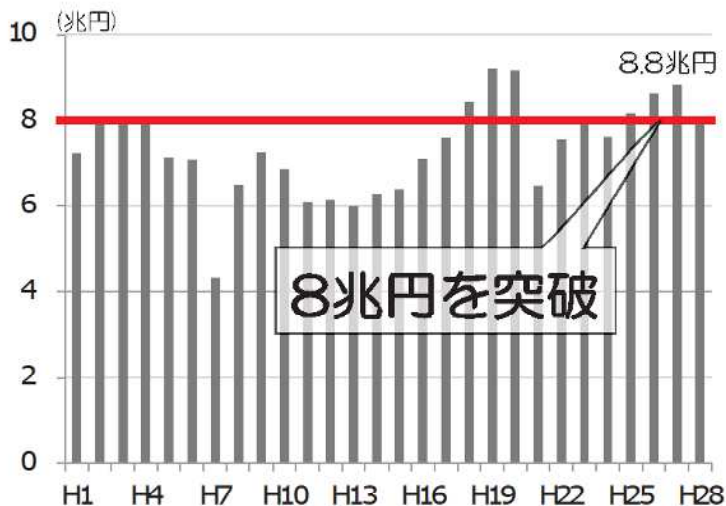
昭和42年7月豪雨災害の際に
約12万m³の土砂を捕捉した五助堰堤
(S32年完成)



整備効果

- 砂防堰堤により、市街地や鉄道・道路等の**重要な交通網を保全**
- 貿易額8兆円**を超える神戸港を始め、阪神間の**経済発展に寄与**

神戸港の貿易額の推移



出典：神戸税関及び大阪税関の貿易統計資料をもとに近畿地方整備局港湾空港部作成。

砂防施設の効果

平成30年7月豪雨では、神戸市灘区六甲山町及び須磨区西須磨で砂防堰堤が崩壊した土砂や流木を補足し、下流への被害を未然に防止しました。

三の谷1号堰堤(三の谷川)



約500m³の土砂を補足

水晶谷第四堰堤(住吉川)



約4,600m³の土砂を補足

過去の災害との比較

